

根尖性歯周炎後にアペキシゲネシス様治癒機転となった根未完成歯2例

○福本志保, 今村圭吾, 有田幸太郎,
西俣はるか, 西口美由季, 釜崎陽子,
藤原卓
(長大院・医歯薬・小児歯)

【緒言】

小児歯科臨床では、根未完成歯の中心結節破折や外傷にしばしば遭遇する。これらが歯髓の不可逆的な炎症を惹起し、根尖部歯周組織に炎症が波及した場合、我々は通常アペキシフィケーションを期待して根管治療を行う。今回我々は上記の既往がある患歯において、根管治療後、アペキシゲネシス様治癒機転となり歯根伸長を認めた2例を経験したので報告する。

【症例1】

患児：11歳11か月 男児
主訴：開口困難，左側下顎角部の腫脹，発熱
現病歴：2日前より発熱，開口障害，左口角～左側下顎角部の腫脹，疼痛出現し，当院受診。
診断：中心結節破折，急性根尖性歯周炎
経過：来院日に即日入院。抗菌薬投与にて消炎後，感染根管処置を行った。

【症例2】

患児：9歳7か月 女児
主訴：左上1唇側歯肉の腫脹
現病歴：1か月前，左上1外傷性歯の完全脱臼に対し近医で再植固定処置を受けた。1週間前より患歯周囲歯肉の腫脹が出現し，当院受診。
診断：外傷性歯の完全脱臼，根尖性歯周炎
経過：感染根管処置，固定除去。

【結果及び考察】

上記2例に対し，感染根管処置後ビタペックスにて根管充填を実施した。通常，このような場合，Hertwig上皮鞘が破壊され，歯根形成は停止しアペキシフィケーション様治癒機転となるとされている。今回我々の経験した2例では，その後の経過観察で歯根の伸長を認めた。これはHertwig上皮鞘の一部が保存されたことで感染根管治療後も歯根形成が生じたためだと考えられた。

小型3Dカメラを応用した新規うがい評価方法の検討

○金田尚子, 佐藤秀夫¹, 山本祐士, 岩下洋一朗²,
橋口真紀子, 伴 祐輔¹, 白澤良執, 山崎要一
(鹿大・院医歯・小児歯, ¹鹿大病院・小児歯,
²鹿大・院医歯・歯教育)

【目的】定型発達児の口腔機能発達不全について関心が高まる中、うがいは口腔機能の評価指標として注目されている。Ogawaらはうがいによる口腔機能の点数化を試みており、有効な評価基準を確立させつつある。しかしながら、評価者の主観により判断している点で、さらなる改良が求められる。そこで、より客観的に評価する目的で、小型3Dカメラにて口唇動作を測定し、うがい機能の定量評価について検討したので報告する。本発表は、本学疫学研究等倫理委員会(承認番号170082疫)にて承認済みである。

【方法】対象は、摂食嚥下機能に問題のない定型発達児4名(女児3名、男児1名、平均年齢6歳0か月)、成人2名(平均年齢27歳)の合計6名とした。小型3DカメラはMicrosoft社のX-Box One用Kinectを採用し、鼻尖、両側口角の3点をマーカーレスで認識し、鼻尖-左側口角間距離(N-L)、鼻尖-右側口角間距離(N-R)を自動記録するプログラムを作製した。試料は水5mL、20mLとし、うがい時の動作は、口唇を左右交互に偏位させる動作(うがい①)と、頬を左右同時に膨らませる動作(うがい②)を測定した。うがい①②ならびに試料の量による口唇動作を比較検討した。

【結果】うがい動作に関してN-LならびにN-Rの距離の変動を認め、うがい①では非対称的に、うがい②では対称的に距離が増減した。試料の量に関して、成人では5mLで平均5.4mm、20mLで平均4.9mm、小児では5mLで平均2.0mm、20mLで平均2.2mm距離が変動した。また、対象が低年齢であるほどうがいの周期や距離の変動にばらつきを認めた。

【考察】小児は発達段階にあり口腔機能が未成熟であることが結果より推察され、Kinectによる口唇動作の測定で、うがいの機能評価が可能であることが示唆された。本システムは、非侵襲で容易に測定でき、うがい動作を継続的に記録することで口腔機能の客観的な発達段階が評価可能となり、小児の顎顔面領域の健全な成長発育指標として貢献できると考えられる。

【文献】Ogawa. A *et al.* Effectiveness of a mouth rinsing function test for evaluating the oral function of children. *Pediatr Dent J* 2017; 27: 85-93.